# ミンタㇻ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 モコットゥナㇱ　絵　小笠原 小夜

## クイズ

道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。いくつ読めるかな。

①札幌市豊平区**精進**川
②北広島市**輪厚**
③登別市富浦**蘭法華**

＝答えは紙面の下に

## 読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときは、字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタㇻ」の「ㇻ」もそうですね。小文字は全部で14種類あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ㇾ」です。例えば「ウエペケㇾ」（昔話）、「セㇾマㇰ」（背中）という単語などに使われます。「ケㇾ」（くつ）と「ケレ」（～をさわる）のように、はっきり発音するとちがう言葉になることがあります。レとルの中間のような音で、短く弱く発音すると良いでしょう。

「ㇾ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学文学部教授の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。

### クイズの答え

①おそうし（現在の読み方は「しょうじんがわ」）　オ（尻・河口）・ソ（滝）・ウシ（ある）・イ（ところ）。オショウシとも発音することから、「お精進」と当て字されたという説がある。

②わっつ　本来はウッナイといった。ウッはろっ骨のこと、ナイは沢。湖や沼、大きな川につながる小さな川が、あばらのように見えるのでこう呼ぶ。幕末から明治時代初めに「ウ」が「ワ」に変わってしまった。

③らんぼっけ　ラン（坂）・ポッケ（～の下）。坂の下。富浦地区をこう呼んでいた。

地名の意味は「北海道の地名」「アイヌ語地名の研究」（山田秀三著、草風館）を参考にしています。

ミンタㇻのこれまでの紙面は、どうしん電子版「親子ページ　まなぶん」で読むことができます。今の「先人たちの物語」だけでなく、アイヌ文化をめぐる季節ごとの話題を解説する記事もありますよ。「まなぶん」でけんさくすると、このページにたどりつけます。ぜひ読んでみてください。

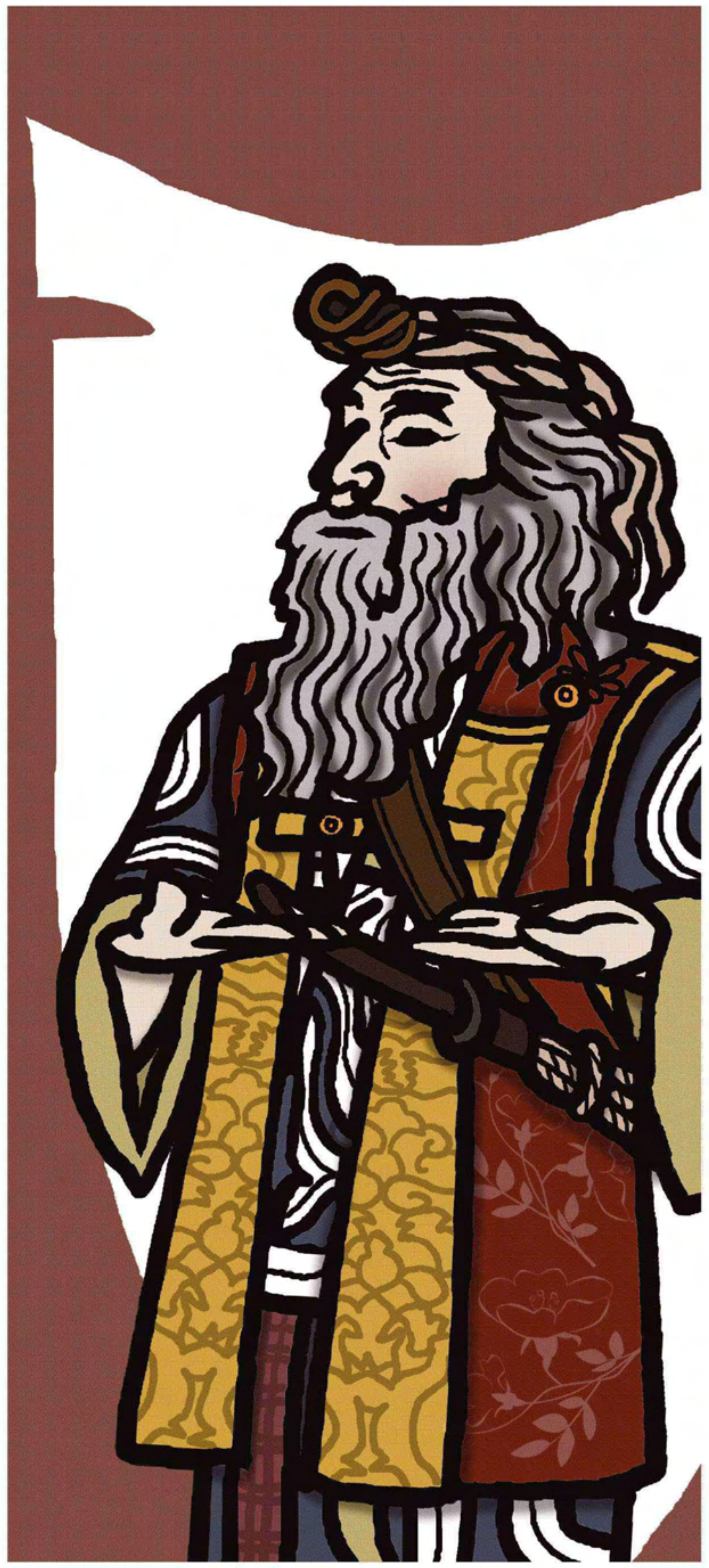
---

# 先人たちの物語　シンリッオルッペ

監修　佐々木 利和

## 家畜を治療 貧しい人ら救う

### 弁開エカシパ（凧次郎）（1847～1919年）



エカシパは、江戸時代の1847年、函館に近い落部村（今の渡島管内八雲町）に生まれました。鉄砲が得意で、晩年まで狩りを行い、ラメトクル（英雄）と呼ばれていました。

また、農業のほか、牛馬商（農業用の牛や馬を売り買いする仕事）をし、獣医師の資格も持っていました。八雲町から後志管内黒松内町など広い地域にわたって家畜の治療をしました。貧しい人からは治療代を受け取らなかったので、農民から感謝され、「伯楽（さん）」と呼ばれて親しまれました。

エカシパは、渡島管内森町で医師をしていた和人の村岡格と親交があり、さまざまな活動を共にしました。

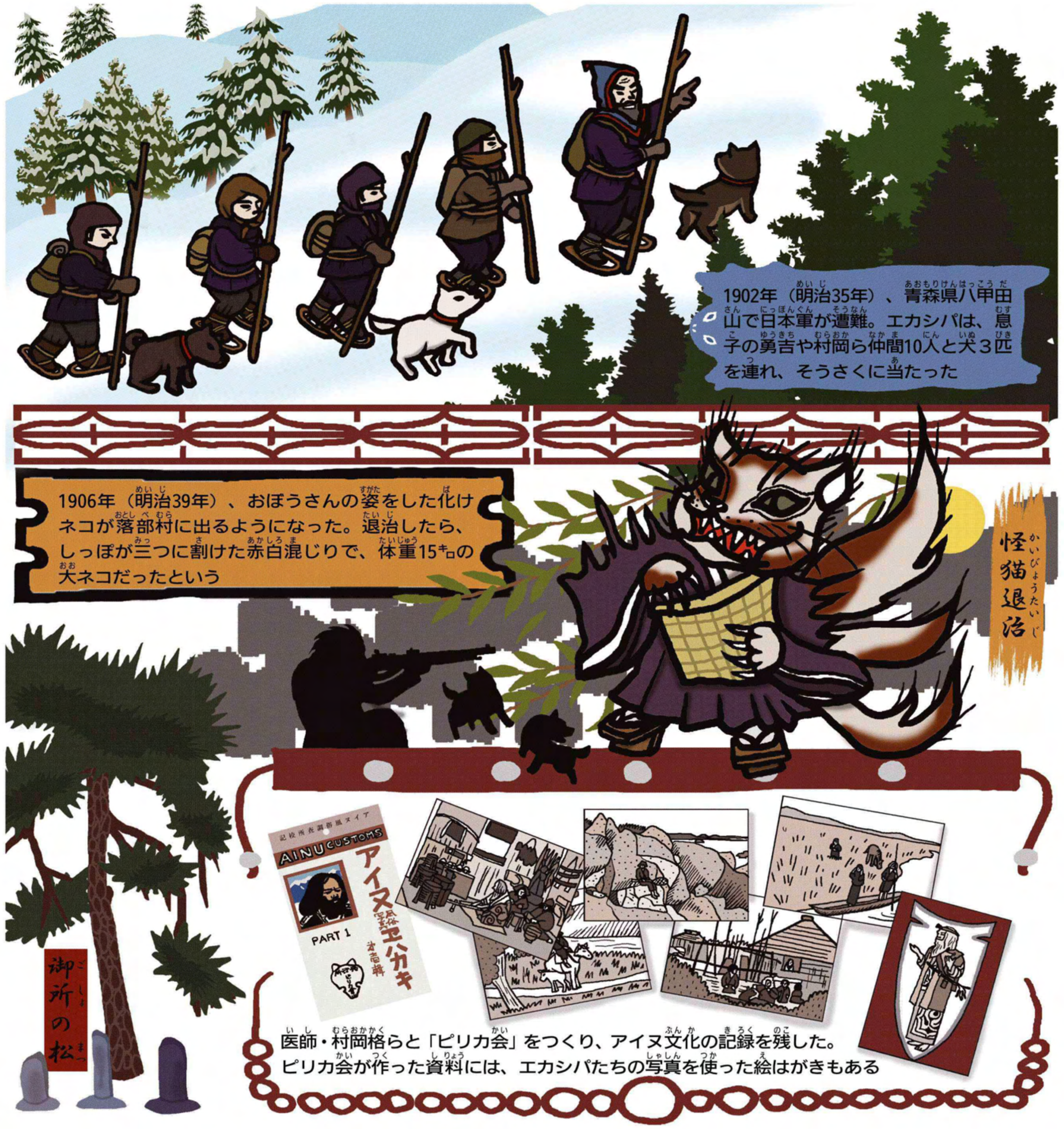
1902年（明治35年）、青森県八甲田山で訓練中の日本軍が遭難し、210人のうち199人が死亡する事件がありました。この知らせを聞いたエカシパは、自ら志願し、14歳だった息子の勇吉や村岡たちと、ぎせい者をさがし回りました。このように、息子の勇吉も幼いころから山に入り、鉄砲のあつかいにも慣れていました。

1906年（明治39年）の春、エカシパの近所に、怪僧姿の化けネコが出るといううわさが立ちました。「怪」は怪しい、「僧」はおぼうさんです。

そしてその夏、宮本という男が化けネコに出くわし、悲鳴をあげてエカシパの家ににげこみました。すぐに勇吉が2匹のイヌとともに飛び出し、鉄砲でしとめました。見るとそれは、しっぽが三つに割けた大きな赤白のネコだったといいます。

村岡や知人たちは1909年（明治42年）ごろ、「ピリカ会」という地域の歴史や文化を広める会をつくりました。民具を提供し、中心となってさまざまなことを教えたのはエカシパです。ピリカ会は、エカシパたちがあいさつやいのりなどをしている姿を写真にとり、解説付きの絵はがきを発行しました。これは、今ではとても貴重な写真となっています。

1919年（大正8年）10月22日、エカシパは教え子の家に向かう途中、橋から落ちて亡くなりました。生前の功績をたたえ、亡くなった場所には「終焉の地」という碑がたてられています。（敬称略）


怪猫退治
御所の松
AINU CUSTOMS
アイヌ風俗写真エハガキ
PART 1
記校所査調俗風ヌイア

1902年（明治35年）、青森県八甲田山で日本軍が遭難。エカシパは、息子の勇吉や村岡ら仲間10人と犬３匹を連れ、そうさくに当たった

1906年（明治39年）、おぼうさんの姿をした化けネコが落部村に出るようになった。退治したら、しっぽが三つに割けた赤白混じりで、体重15㌔の大ネコだったという

医師・村岡格らと「ピリカ会」をつくり、アイヌ文化の記録を残した。ピリカ会が作った資料には、エカシパたちの写真を使った絵はがきもある

## アイヌ語や地名を名前に

アイヌ民族にはもともと名字がありません。明治の初めにできた法律によって、日本語の名を名乗ることが決められ、新たに作りました。

アイヌ民族の名字と名前は、もとのアイヌ語名や、住んでいる土地にちなんでつけられたものがよくあります。

エカシパの父はペンケイという名前だったので、弁開という名字はここからきているのかもしれません。

また、エカシパは「イカシパ」となまって呼ばれることが多かったようで、凧次郎という名前は「イカ→タコ」のようにアイヌ語名のひびきから連想して付けられたともいいます。

もちろん本当はイカとは関係なく、エカシ（おじいさん）とパ（～を見つける）を合わせて「おじいさんが見つけた」という意味だと言われています。

アイヌ語の名前は５～６歳ごろに、その子の性格や成長する間の出来事などにちなんでつけられることが多いのです。

エカシパも幼いころ、例えば「迷子になり、おじいさんに見つけられた」というような出来事があったのかもしれません。

アイヌ語の名前は、大正時代から昭和になると、ほとんど使われなくなりました。平成になるころから、アイヌ語名を名乗る人が増えてきました。

ちなみに江戸時代は、和人の庶民も名字を使いませんでした。今みなさんが使っている名字のほとんどは、法律ができた時につくったか、何代も使っていなかった名字を使うようになったものだといわれます。